武蔵野市の桜

**武蔵野市には、春になると美しい花を咲かせる桜の名所が多数あります。
私たちの「ふるさと」を象徴する風景として親しまれている桜は、どのような経緯で
このまちに広まっていったのでしょうか。歴史や人々の思いから、その成り立ちをひもときます。**

武蔵野市内に点在する多彩な桜の名所

武蔵野市内およびその周辺には、いくつもの桜の名所と呼ぶべき場所があり、春になると美しい花が開き人々の心を和ませてくれます。「日本さくら名所100選」にも選ばれている井の頭恩賜公園の桜は広く知られていますが、それだけでなく、武蔵野陸上競技場や武蔵野中央公園、小金井公園、武蔵野市役所前の中央通り、玉川上水緑道、さらに町名にもなっている桜堤など、桜を楽しめる場所が市内のあちらこちらに点在しています。

この中で最も古い桜の名所といえば、玉川上水沿いを約6キロメートルにわたって続く「小金井桜」でしょう。武蔵野・西東京・小金井・小平の4地域に連なる桜並木は、江戸期から人々がわざわざ遠方から花見に訪れるほどで、浮世絵師・歌川広重は何度も小金井桜を題材にするほどお気に入りの景色だったといいます。大正13（1924）年には国の名勝に指定されました。

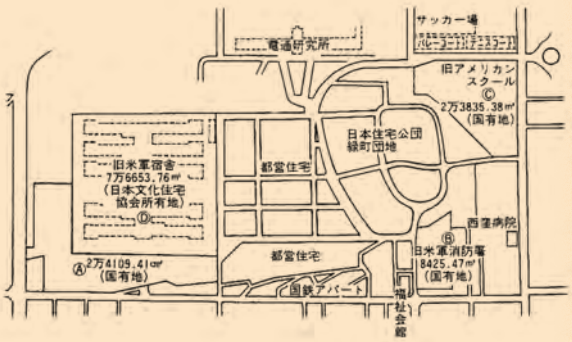
武蔵野市の樹木としては、ケヤキをはるかに上回るほどの本数を誇っている桜ですが、ここまで桜が多くなったのはどうしてなのでしょうか。古くから人々に親しまれている花という理由もありますが、昭和29（1954）年に市道第17号線（中央通り）が全線開通した際、中央通りや第一浄水場などに桜の木を植え始めたことも大きなきっかけになったと考えられます。

都市化が進むまちで桜の名所づくりを

戦後間もない昭和22（1947）年、武蔵野町から市へと移行し、人口6万3000人のまちとして新たな歩みをはじめた武蔵野市。市民生活の基盤インフラである上水道事業の整備が始まり、昭和29年から給水が開始されました。公営住宅の建設ラッシュが起こり、これに伴い小中学校の増築や新設が相次いだのもこの頃です。こうして、急速に市内の都市化が進む一方で、市は緑化計画にも力を注いでいました。

桜の木が植えられた後の昭和30年当時の中央通り

昭和29年9月の新聞記事には、「武蔵野市は緑化計画の一環として市民のレクリエーションの地である市営競技場周辺に桜を植えることになり、早ければ11月から植え付けを始めるので、来春には『桜の名所が一つ増えます』と係は期待している」と記され、この時点で市が桜による名所づくりを構想していたことが分かります。記事には、市営競技場スタンド（現・武蔵野陸上競技場）の周辺に70本、市営サッカー場（現・武蔵野軟式野球場）の周りに60本の桜が植えられ、さらに中央通りの両側にも約90本植えられる予定だと



市役所周辺図。Ⓒが現在の市役所（武蔵野市百年史より）

記されています。

また、同じ記事の中で当時の市長は、「これから都営アパートのような鉄筋造りの建物もふえることだし、桜のほか街路樹についても都市計画の面から十分の検討を加え、少しずつでも実現していきたい」とコメント。市内の都市化が急ピッチで進み、さらなる人口の増加が見込まれる中、少しでも市民に潤いや憩いを与えたいという思いが、桜の植樹に込められていたのではないでしょうか。

また、桜が植えられた現在の市役所周辺の地域は、戦前・戦中には日本の軍需産業を支えた中島飛行機武蔵製作所があった場所。戦後、その東工場跡地の一部は民間事業者への払い下げや、国・都などによる開発が進み、野球場、研究所、住宅などになりましたが、昭和26（1951）年の日米安保条約によって接収された西工場跡地は、グリーンパークと呼ばれる米軍宿舎に、そして残る東工場跡地には米軍消防署、アメリカンスクールが作られました。昭和48（1973）年、これらの施設が日本に返還されるまで、ここは「通りを隔てたアメリカ」でした。今改めて振り返ると、中央通りに植えられた桜の並木が、日本とアメリカの境界のようにも見えます。当時、市民からこの場所に米軍施設があることによる治安悪化や風紀の乱れを懸念する声が上がり、反対運動も起こっていたことから、市民の心を少しでも和らげるべく日本のシンボルともいえる桜が植えられたと捉えることもできるのではないでしょうか。

第１回武蔵野桜まつりの様子

現在からすれば、「市役所前の大通りだから中央通りには象徴的に桜並木があるのだろう」と思う人も多いかもしれませんが、今の場所に武蔵野市役所が移転したのは昭和55（1980）年のことなので、桜の並木はそのはるか以前からそこにありました。昭和29年に植えられた桜が、その後のまちの景観を導くシンボルの役割を果たしていたといえるかもしれません。

武蔵野の桜並木を「ふるさと」の原風景に

市内の桜は次第に武蔵野市の名所として認知されるようになり、高度経済成長の時代を経てバブル崩壊を迎えた平成４（1992）年の市議会定例会では、当時の議員から武蔵野市での「桜まつり」が提案され、当時の市長もその必要性について賛同しています。この頃、市の第三期基本構想の中で、「住民の異動が激しい本市では、ふるさと意識が定着しにくいといわれている。そこで、武蔵野の自然や文化性を生かした、心に残る事業を展開し、市民のふるさと意識の高揚を図る」ことが提言されていました。

こうした流れを受け、平成５（1993）年、「武蔵野桜まつり」が開催されることになりました。折しもこの年は、明治26（1893）年に多摩地域が神奈川県から東京都（当時は東京府）に編入されてちょうど100年目。多摩東京移管100年を迎え、これから先の100年を見据えながら、「〝このまちに住んでよかった。私のふるさとは武蔵野市です〟と市民に思ってもらえるようなまちづくりを目指したい」とする市にとって、武蔵野桜まつりには、桜をきっかけとして市民に「ふるさと意識」を高めてもらいたいという思いも込められていたのです。

以来、武蔵野桜まつりは春の風物詩の一つとなり、今年は第１回から数えてちょうど30年。コロナ禍以降はオンラインによる開催に変更され、大勢が一カ所に集まるイベントは中止を余儀なくされましたが、それぞれの場所で思い思いに桜を愛（め）でるスタイルが定着しつつあります。市内のあちらこちらで桜を見上げながら、「ふるさと」武蔵野市が歩んできたさまざまな歴史が木々に刻まれていることに思いをはせてみてはいかがでしょうか。

ちなみに、平成５年３月の『市報むさしの』紙面では、第１回の武蔵野桜まつり開催を記念して、「武蔵野桜音頭」の歌詞が一般公募されています。同年９月の市報には、武蔵野桜まつり実行委員会の審査によって選ばれた歌詞が掲載されました。作詞者は市内在住の大庭義隆さんです。

「はずむ心にそよ風が　吹けばやさしい花吹雪　ここはいずこか錦絵の花のトンネル中央通り…」（歌詞より）

取材・文／さくらい伸　取材協力／武蔵野ふるさと歴史館　参考／市報むさしの、武蔵野市百年史